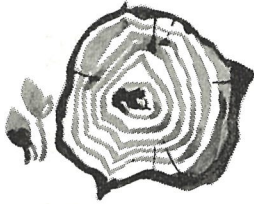


故 同志社中学長

野村仁作先生の墓に

お参りして



高 橋 勘

故、野村仁作先生は、大正十二年九月一日、同志社旧制中学にご勤務になり、昭和十一年よりご停年退職時の昭和二十年四月三日まで、中学長として同志社にご尽力なさいました。「魔艦」というあだ名で生徒に慕われた、きびしい中に温情あふる方でした。どんな日でも、学校中で一番早く、作業員より早く登校されたことは忘れません。ご永眠は昭和三十一年十月四日でございます。私が時々、野村先生奥様をご訪問すること

を、前窪勝之助先生夫人がお聞きになり、「二十年程前に、一度、あの島にご訪問したことがあるが、もう一度是非参上したい」とのことでした。

前窪勝之助先生は、大正五年四月一日より昭和三十六年三月まで、四十六年間、旧制同志社中学、新制同志社高校にお務めになった、同志社中学出身の先生です。故、野村仁作先生が学長時代、実に立派な教頭として活躍なさり、野村先生のご停年後、戦後の混乱した、困難な時代を背負われた旧制同志社中学校最後の名校長でございました。ご永眠は昭和四十七年四月七日でございます。

又、ご存知のように、六十年にわたり、同志社旧制中学、新制同志社中高校に一身を献げられた中堀先生が、今度東京に転任なさることになりましたが、中堀先生と私は、瀬戸内のあの小島に野村先生をご訪問し、涙を流して喜ばれたことがございます。中堀先生も、二度と野村先生夫人宅を訪れる時もあるまいから、是非参加したいとのことで、中堀先生、前窪先生夫人と私の三人で、野村先生宅にでかけることに致しました。来年は創立百年ですから、そのご報告をかねてお墓参りをした次第です。創立記念日の十一月二十九日朝十時、皆でそろって野村先生の墓参りができたことは感激の極みでした。その時の紀行と墓参写真を前窪先生夫人に、野村先生宅のスケッチを中堀先生に書いて頂きました。野村先生夫人にもお願いしましたが、体のご不快のようでごむりのようですから、そのお便りをのせました。

同志社も百年たつと、次々とよき先生方を天国に送ります
が、私たちもそのあとをたどる者でありたいと念じています。

(高等学校教諭・数学)

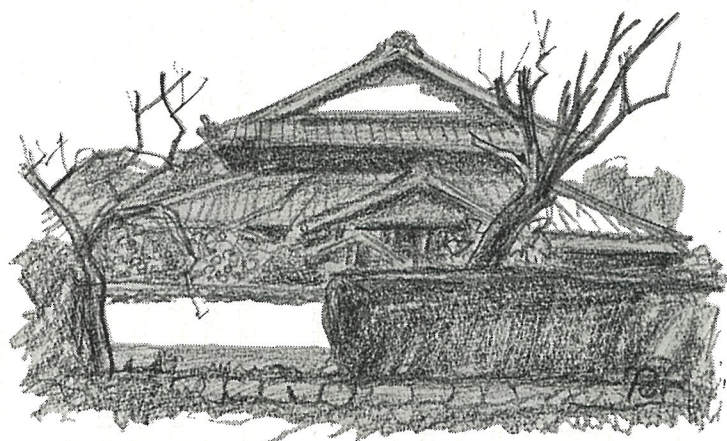
広島紀行

前 窪 花

昨年十月中頃、高橋先生より、広島県瀬戸田町名荷村の、故
野村仁作先生のお墓参りをかねて、奥様の御気嫌伺いに、来る
十一月二十九日頃、中堀先生と参りますからお連れ致します、
とのお話しが有りましたので、色々と考えました末、お供する
事に致して居りました。

その時、先生が、私は一日前より車にて岡山の親戚に寄り、
翌日、岡山駅にお二人が着かれる時、お迎えに参りますから、中
堀先生と岡山まで来て下さい、との電話を頂きました。二十九
日朝、中堀先生が、私方までお出で下さいましたので、先生の
お供をして新幹線にて岡山へ参りました。

十時すぎにホームで先生とお会い致し、それより先生の運転
にて、四方の景色を眺めたり、色々岡山県のお話を伺い、





野村先生墓前にて

尾道まで参りました。それから、フェリーに乗船、瀬戸内海の青い海の美しい色、あちこちの島には紅葉した木々、緑色の樹木、残りのみかんの色等の美しい事、まるで動く絵を見て居るようでした。

四時すぎに瀬戸田に着き、野村様宅に参りました。奥様がとてもとても、お待ちかねにて、大変喜ばれて、こうふんしてしまいました、と笑って居られました。入浴後の夕食にはお心づくしの山菜、とくに海の新しいお魚、えび、たこ等の御馳走を頂きました。お料理は、故先生の姪のお方がなさいましたとの事、びっくり致しました。時間の経つのを忘れる程お話しをして、十一時頃、又明日という事でやすませていただきました。翌日、三十日はお二方の先生と奥様と私と、お手伝いさんで、小高い山の上の野村先生のお墓に参り、心から先生の御存命中

をしのびました。

午前十時頃、おなごりつきない奥様とお別れして、瀬戸田よりフェリーにて、もと来ましたコースを逆に船上より、美しい景色を再び眺めて尾道に着き、車にて笠岡まで。ここにて中堀先生は、お国の岡山の御親戚に泊られますので下車、お別れしてドライブをつけ、先生より岡山県の事、それについての名所や古跡等のお話しを聞きながら、倉敷の大原美術館に着きました。

私はまだ見た事が有りませんので嬉しく見せて頂きました。中々立派で、世界的に高価な絵画が沢山有りました。つづいて、途中、赤穂の大石神社、宝物館、大石蔵之助の屋敷、庭園の跡の一部等見物致しました。夜もそろそろ暮れかけてきました。名神高速道路では、神戸の手前より大阪の東部にかけて、百万ドル夜景の美しさ、目がさめるようでした。いよいよ京都に入り、家へ着きましたのは丁度九時少し前でした。

このような楽しい、印象深い旅行も、お二人方の先生のお心づくしの賜と誠に嬉しく存じます。へたな写真も約三十枚ほどカラーで写して参り、時々出しては、当時を思い出してながめて居ります。その一枚がこれでございます。

思いがけなく、老いた身を案じ合う旧友をお尋ねすることが出来、昔話に花を咲かせ、一方、ドライブをかねて楽しい旅をさせて頂けたことは、生涯、忘れることが出来ない思い出の一つでございます。

野村先生奥様

からの便り

春浅く、冷い日もございますが、お元気で何よりです。いつもお忘れなくお便り下さり有難く御礼申し上げます。

私事、昨年十二月三十日に瀬戸田町へ買物に参り、荷物は全部女中に持たせ、あまり疲れたように思いませんのに、三十一日、朝、目が覚めましたら、首が左右にも、上下にも動かせず、作り付けの人形の首みたいになり、吸吞みで流動物しか口にはいれず、正月三日まではどこもお休み、四日土曜日、五日日曜で、六日に医者に来て頂きましたが、お疲れでしょう、と言つて、病名もわからず、この島には、内科、小児科、外科しかなく、尾道の農協病院に行きましたら、脳波にも異常なく、お歳のせいでしょう、とのこと。もう八十一歳ですから、いつ死んでもおしくないと思つていますが、私の考えでは、脳神経からきているのではないかと思います。薄紙をはがしたように少しずつ痛みもつらぎましたので、女中をつれて瀬戸田町へ参り、名荷のバス停留所で女中に買物をさせ、私一人で停留所に待つていましたまでは覚えていましたが、後は何も知らず、

気がついたら、病院で医者、看護婦にかこまれ、どうしたのでしょうか、と申しましたら、姪が、叔母様が倒れて気を失つたので救急車でお連れしたのです、とのこと、私の方がびっくりしました。所も停留所だものですから、人が集まり、あちこちへ電話をかけ、姪は私が死んだものと思ひ、泣くやら大さわぎでした。昨今は気分も落ち付き、食事も普通に頂けるようになりましたが、子供五人が大あわて、次々に見舞に来て、東京、名古屋、大阪と、皆が私を名荷より引き上げるように申しますが、静かな田舎で氣候温和、空気が清く、瀬戸内の風光明媚、それに天下一のお手伝いさんが、私の手足のごとく働いてくれ、それはそれは、おがんでもいい位のお手伝いで、どこへ行く気にもなりません。子供の心情も考えなさい、とこわい手紙がくるやら、子供らは電話で相談して心配してくれませんが、私はやっぱり名荷が良いです。

こんなことで、御返事がおそくなり、お許し下さいませ。三寒四温の折、くれぐれもお体御大切に遊ばして下さい。同志社のみなさまにくれぐれもよろしくお伝え下さい。かしこ。

(和)



高山 寛氏寄贈の書額類に寄せて

同志社社史史料編集所

去る三月十二日、京都市在住の校友、高山寛氏²（昭和三十年大学短期大学部²が、母校に住谷総長を訪問され、同志社創立百周年を記念して、同氏の祖父中村栄助氏、父君高山義三氏を経て受け継いだ新島先生関係の貴重な遺品・資料三点を同志社に寄贈された。

ちなみに中村栄助氏²（生年一八四九年）は、石油買付に関する外国商社との裁判敗訴を動機にキリスト教への回心、新島先生との接触機縁により明治十六（一八八三）年二月同志社社員に遇され、永眠まで五数十年間理事として同志社の運営に参画努力し、三度も総長事務取扱として難局に処した功労者であり、高山義三氏²（生年一八九二年）は、中村栄助氏の三男で、京都市長を三期勤め、同志社社友として側面的に同志社の協力者であった。

そこで今回寄贈されたものを紹介して高山氏の篤志に対し深謝の意を表する一端とした

い。その一は『新島先生書「凛冽萬古存」²（額装）一面』で、出典は中国宋末の忠臣文天祥の獄中作である正気歌の中にあり、その意味は、「正気は人をぞつとさせるように厳然として永久にこの宇宙間に存在するということ」（諸橋轍次著「大漢和辞典」より）であるが、何時頃の先生の書であるかは定かでない。縦三十一・五cm、横一三〇cmの右横書の力強い筆跡である。

その二は『湯浅一郎筆新島先生肖像（油絵一面）』で、筆者は明治二十一（一八八八）年二月に同志社社員（理事）の中に加えられた、新島先生と同郷の安中の実業家（味噌醬油醸造元・政治家で、安中教会創立者の一人であった湯浅治郎の長男で、明治二十一年同志社英学校英学普通科卒業後、洋画に専念し、二科会創設者の一人であり、自らの芸術を大成した人である。この一面は大正八（一九一九）年の

同氏の作品で現在安中教会に掲げてある新島先生の名作肖像画よりひと回り小さく、縦五十一・六cm、横四十四・一cmのもののだが、絵筆のタッチは両者非常に似通ったものがあり、制作年は書かれていないが、年齢的にはやや若年の新島先生の風貌が窺われるところから、安中教会のものより以前の作品と見るべきである。

その三は『新島先生所持のアメリカ製銃銃一挺』で、新島先生はこれを在米中か、帰国後日本で入手されたかは知り得ないが、全長九十九・九cm、銃身七十一・九cm、銃口〇・六cmの散弾銃である。先生は同志社創設後、多年の宿願であった同志社大学設立運動のため東奔西走された激務の寸暇を削いて近郊で狩猟することを趣味とされていた。このことは新島日記中の明治十六（一八八三）年四月二日の記事として新島公義（先生の弟雙六の養子とともに京都を発し、堅田の伊勢屋に一泊して翌日琵琶湖上に遊猟した内容のことがあり、また新島遺品庫に以前から何種類かの散弾のみが保管されていること等を考え併せてこの銃の寄贈を受けたことは意義深く、まことに価値あるものである。（青木正太郎記）